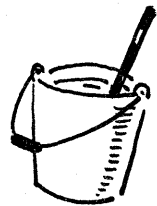


大人になってゆく子ども

磯貝保子



子どもたちの成長の跡を、いくつかのトビックスを拾いあげて、断片的につづつてみようと思います。

☆描画のはじまり

ある日、はじめて、娘は部屋の壁に鉛筆でなぐり描きをしたのです。一歳四か月のことです。これは、波形なぐり描きの一種と言っているでしょう。一歳十か月には、円形なぐり描きがあらわれました。

二歳三か月目、大きな円を描き、その中に点々を打って、「おうち」「おめめ」、さらに六本の線を下に縦がきにして、「ママちゃん、めんよしてるの」

これが人物を描いた最初です。

それから毎日、模造紙を壁にはっておき、描きたい時にはいつでも描けるよう、まわりにクレヨンを置いておくようにしたのです。描くことを要求したり、描く場所を指定したり、直したり、また何を描いたのかをたずねたりするようなことは、一切しませんでした。ただ何かを描いた場合は、娘が口にしたことだけをつけ加え、日付を書いて保存し、新しい紙と、とりかえておいたのです。

その一週間後には、描きながら、「おつむ」「おめめ」「ほつべ」「おうち」「赤いおくつ」などを口にし、さらに、この一か月間に加わったものには、「おはな」「おみみ」「あご」「おてて」「りぼん」「おむね」「おへそ」「スカート」「たっほ

などがあります。

しかし、一日、一日を詳しく注意して見ると、「あご」を描いたときには、「おくち」がなかったし、「おみみ」のあるときには、「ほっぺ」が描かれないというように、一方が描かれれば、他方が描かれずということを知りかえしながら、すこしずつ人間の姿が出来上っていったようです。

指を手の先に、細かく描写したのは二歳五か月、眼や口に輪郭が描けたのは三歳、三歳半になると、眼・鼻・口のすべりに輪郭が出来ました。この頃、手は、顔にあたる部分から直接左右に出ています。そして三歳七か月には、胴の輪郭が出来ました。

すこし時間をとばしますが、洋服を着て、靴をはいている女の子が完成するのは、六歳四か月前後になります。この間、全くお手本を示すことがなく、また注文をつけたりしなくても、他の多くの観察者が記録したのと同じように、人物画が完成されていく過程は、私にとって興味のないものでした。なかでも身体の部分部分が一つずつ加わるのではなく、描けたり消えたりという消長をくりかえしていく姿は、印象的なものでした。

☆遊ぶすがた

息子は二年生の夏から、自転車を乗りまわすようになりました。団地内とはいふものの、バス道路もあり、かなりの交通量です。二・三人、多くなると七・八人のグループで自転車をつらねて走り廻るのです。救急車の音にハッとされたのもこの頃です。

夕ぐれ時になると、心配でベランダに立ったり、外に出たりして帰りを待ったものです。勢いよく走ってくる子どもの頬が夕日に映え、一層赤く見えました。

この時期は、小学校のPTA校外活動の一つとして一月に一回、自転車点検がありました。点検には必ず行きましよし、自転車の乗り方について、細かく話して聞かせたりしました。

同じ頃はじめたものに冬のローリースケートがあります。

学校から帰ると、三・四人のお友だちと、早速ローリースケートです。コンクリートの上で、よく転びました。すねが紫色になったことが何度もあります。しかし、こんなとき、「痛い」とは言いません。子どもというものは、自分のした

い事、あそびたい事に関しては、痛さのもり超えるものだと感心したものです。はじめてから一か月もすると、寒風の中、髪を逆立て、ジャンパーをふくらませながら、ローラースケートに興じている姿を、買物に出て、しばしば見かけたものです。

危険もいっぱいでしたけれど、あの子どもらしい、たくましい姿は今も忘れることができません。二年生そして三年生の冬のことです。

その後しばらくして、ローラーの音がうるさい、あるいは危ないという声が出て、PTAの集まりなどで話し合いが重ねられました。結局この地区では禁止になってしまいました。それぞれの事情もあり、禁止せざるを得ないこともよくわかるのですが、こうして子どもの遊びが一つ消えていききました。

この時期の、特に男の子の遊びを見ていると、自転車にしろ、ローラースケートにせよ、野球であれ、多少の危険は、いつもつきまとっています。また付近の住民にとっては、うるさかったり、多少の迷惑さもつねに含んでいるように思われます。しかし、それ等の遊びを通して、子どもは大きく成長していくものだとこのことを肌で感じることができます。

自転車乗りや、ローラースケートをしたことで、息子の足が、固くたくましくなったことが、さわってみて、はっきりわかりました。子どもたちが自ら求める遊びの中には、その時期の発達にかかせない自然の要求があるように思えてなりません。そして、その時期を逃がしたら、再び、その要求を満たしてやることは、むずかしいことでしょう。

今日まで、幸いに大きなケガもせずすんだので、このように言えるのかもしれない。

☆自然とのふれあい

日本アマガエルのこと

三年生の六月のことです。友だちと遊びまわり、夕方戻ってきた息子は、紙の袋を差し出して「カエル、飼ってみるんだ」というのです。みると、黄みどり色の小さな蛙が四匹入っています。二キロ程はなれた田んぼの付近でつかまえたというのです。

プラスチックの水槽に大小の石や草を入れ、水をすこし入れました。あみ目の蓋をして、蛙の住み家は出来ました。息

子は四匹の蛙にそれぞれフォーリーブスのメンバーの名前をつけました。

「ター坊、こっちは向いて……」

困ったのは餌です。蛙はハエやカをたべるということで、夕方になると多摩川の土手にアミを持ってとりに行きました。とってきた小さな虫が、うまく水槽に入ると、蛙は上手にとびついて、ハエやカをたべるのです。時には、水槽に入れるのに失敗して、部屋の中をカやハエがとびまわるということもありました。

ところが六月のこと、雨の日が続いて、餌をとりに行くことができなくなりました。蛙は日に日にやせて、息子が困っていると、ちょうどラジオの子ども電話相談室で「蛙の飼育方」を尋ねた子がいました。「蛙の餌には挽き肉を糸の先につけて、たらしやるといい」とのこと。早速、木綿糸の先に挽き肉や、ハムをちぎってつけ、入れてみました。でも下げてみるだけでは蛙はとびつきません。糸をほどよく動かすと、よく飛びついてたべるのです。

家中の者がおもしろがって、蛙に餌をやるのを競争しましたが、上手なのはやはり息子でした。こうして二か月ぐらい、小さな蛙たちは、息子の友だちでした。手の上のせて

遊びに出かけたりもしました。でもすこしずつやせていくように見えて、可愛そうになり、もとのところへ放しにいったのです。

「餌を沢山たべて、満足してアクビ(?)していた顔、とても可愛かったなあ。」

しばらく経った後でも、息子はそういつてなつかしそうにしていました。

それから一か月後、次のような記事が新聞の科学欄にのりました。早大理工学部のグループが、「人工カエル眼」を作ったというのです。蛙の眼は、非常に面白い機能を備えています。眼の網膜が特殊な構造になっていて、静止物体にはぶく、移動物体に対しては鋭敏である。蛙はハエなど動くものに対しては、百発百中の正確さでエサを捕捉することができ。かりに車の走っているビル街を蛙に見せたとすれば、蛙に見えるのは走っている車だけであると。

息子と私たちは、この記事を読んで、なるほどと感心したものです。息子が一番餌をやるのが上手だったのも、彼の動かし方が、蛙の網膜のメカニズムに、最も適していたからなのでしょう。

カタツムリのこと

同じ頃、カタツムリを育てたことがあります。当時の担任の先生が、クラスの子どもたちにカタツムリを一匹ずつ下さったのです。

プラスチックの容器に土を入れ、餌にはキャベツをやりました。乾燥しないよう、霧ふきで水分を与えました。

一か月ほどして、土のくぼみに小さな小さな丸いものが固まっているのを見つけたのです。六月の十一日でした。息子も私をはじめたのことで。

「卵らしいね」

それから毎日、息子は新しいキャベツととりかえては、のぞきこみました。卵を発見してから十九日目、小さなピンポン玉がパッとわかれて二、三ミリの赤ちゃんカタツムリが誕生したのです。ちゃんとうずまぎの殻を背にしています。数えたら二十六匹いました。

この三日後、親カタツムリは尾の方を土の中に入れて、また卵を産みました。これは十四日目に十六匹かえりました。

こうして、ほぼ一週間おきに、ひとかたまりの卵を産み、約二週間ぐらいの間にカタツムリがかえり、六・七・八の三

か月の間に、一匹の親から、一九八匹のカタツムリが生まれたのでした。これらの赤ちゃんカタツムリは間もなく、野原に放してやりました。この頃、息子の描いた絵には、親カタツムリのまわりに、小さなカタツムリが沢山描かれていました。

「このカタツムリ、雌なんだね」

と息子はいいました。でも親カタツムリは一匹だけでした。しばらくたってから、私たち親子は、カタツムリが両性の役目を持っていることを、本で知ったのです。

わが家の水槽は、金魚が泳いでいることもありましたが、それよりも蛙とかカタツムリ、そのほか、多摩川から息子がとってきたザリガニ、くちぼそ、めだか、タニシなどが住んでいたことのほうが多かったです。

四十七センチ四方の容器の中で、小さな生きものたちは、いのちの不思議さを、おしえてくれました。

わが家の水槽は、自然のひとつの縮図であったようにも思えますし、息子が身の回りの世界へ眼を開いていく窓口でもあったようです。

☆創るたのしさ

五年生から六年生にかけて、人形作りに熱中した時期があります。娘ではなくて息子の方です。娘はこの頃、もう大学生になっていました。辻村ジュサプローさんの人形が出演するテレビの人形劇「新八大伝」がきっかけでした。

とにかく、ものを創ることは好きで、野球ゲームも自分で空箱を利用して作り、しばらく楽しんでいました。この時は古いテレビの強力マグネットをとり出して、カーブやシュートができるようにしてありましたし、ホームベースに穴があくようにして、「消える魔球」も投げられるのだと得意でした。市販のにくらべて見栄えこそしませんでした。が、機能的には十分ととのっていたようです。

ところで人形作りですが、はじめは色画用紙を切りぬき、ボードで貼り合わせ、テレビの「新八大伝」の人形と見くらべながら、つくっていくのです。とくにこったのが顔でした。頭の中には、犬山道節なら道節なりのイメージがあるのでしょうか、なかなか気に入る様に描けないでしょう、一つの人形の顔を、くる日もくる日も描きつづけたことがあります。

ます。その執念というか、根気づよさに、何かこわいような感じさえうけました。しかし本人は別に意気込んでやっているという風でもなく、淡々として、その描き直しを楽しんでいるようでした。

ある日、工芸店で和紙に目をつけた息子は、これを買ってきて、再び作り直しをはじめました。和紙の持つしなやかさで、髪の毛が一層上手につくれえました。

この根気づよさが、いつの日か勉強の方に向いてくれたら……と思った日もありました。

* * *

断片的なトピックスをあげてみましたが、これらは、子どもたちの成長の一コマにすぎません。成人式をむかえた娘は、これから大人として社会に出ていかねばならないでしょうし、中学二年生になる息子は、受験という壁を乗り越えていかねばなりません。

子どもときの、楽しさとはちがう、人の世の喜び、悲しみに出会うこともあるでしょう。元気で、歩みつづけてほしいものです。